

# kurenai

## 62

### くれなる叢書

埜中清市著

天雲

A5変型三〇〇首  
一三〇頁二〇〇円 既刊

山口 實著

長崎

A5變型二五〇首  
一一〇頁二〇〇円 既刊

難波礼二著

朝鳥

A5変型二〇〇首  
九〇頁 一五〇円 最近刊

池田道夫著

苦行林

A5半截變三〇〇首  
二〇〇円 近刊

安田武夫著

題未定

A5変〇三〇〇首  
一三〇頁二〇〇円 近刊

奈良縣高市郡八木町二〇二  
爐書房 刊行

### 山口 實歌集

(くれなる叢書第二篇)

長崎

田中克己序詩

過ぎし日の愛慾の遍歴に傷ついた心が  
殉教者の運命のさびしきにも似て、ス  
テインド・グラスの光の中にほのぼの  
と美しくも、悲しく、よみがへつて來  
るのであつた。

A5變型、本文上質模造紙  
兩入、寫眞一葉特製豪華本、  
一一〇頁定價二〇〇圓

### 難波礼二歌集

くれなる叢書第三篇

朝鳥

若き日の情熱は、天地にも注がれてゆ  
くのである。自然を愛する心はひたす  
らにしてしかも明確。愛人と結ばれた  
る日を記念する豪華処女歌集

A5変型本文上質模造紙  
美装カバー付特製本  
九〇頁 定價一五〇圓

### 苦行林 歌集

くれなる叢書 第三篇

池田道夫著

氷りつくやうな悲しさと、魂を喰ひ  
裂く無常感の歌三百首、一は原稿の  
散逸を防ぎ、一は「くれなる」の詩友  
に贈るために、ささやかに出版する。  
定價二百円

### くれなる雑誌

この度、天雲出版に際しましては、各位の御聲援  
御鞭撻を忝ふ致しました。心からお禮を申し上げます。  
埜中清市歌集を最初として、同人集として処  
女歌集を、世に問ふことになりました。山口実歌  
集「長崎」は第二輯として刊行、難波礼二歌集  
「朝鳥」は二月末日刊行の豫定です。各位の高覽  
に堪へ得ますれば幸甚です。

くれなる 第七卷 第一号  
印刷所 株式會社朝日堂  
印刷者 大阪市天王寺區上之宮町五六 吉川仁造  
發行所 大阪市東成區大今里北之町五丁目二一  
くれなる發行所

### 埜中清市歌集「天雲」 特 輯 號

- 天雲の作者……………田中 克己
- 天雲出版記念會記……山口 實
- 天雲の横顔……………山口 実
- 天雲を支へる力…………難波 禮二
- 天雲の作者に寄す……書 牌
- 天雲の佳作……………保田與重郎
- 天雲の放談……………池田 道夫
- 作 品……………田中克己、他

天雲の作者 田中克己

昭和二十三年の秋、大和の国の秋も三年目となり、僕は鳥見山の北のふもとに住んでゐた。莖中氏が訪れて来たときの話題は、まちがひもなく歌であつた。茂吉好き、千樞好き、利玄や順も好きだつたといふ僕の自己紹介に對し、莖中氏は「くれなゐ」を出して、自分の歌を、多分はづかしさうに見せられたと思ふ、僕の記憶にして誤りなければ、この時の歌の中には「天雲」の最後に近く載せられてゐる「掛地図の海」の一聯があつた。

○先がけて咲く紅梅にまみ寄せて別るる~~は~~は何思ひけむ。

○美しき涙拭はずまみあげて言ひ寄る子らないだきしむるなれ。

○いざさらば行けとこそわが云ひしとき肩ゆりて泣く童なりけれ。

僕はこれらの歌が大変気に入つた。戀歌でないことは、第三番目の歌が示してゐる。しかし戀以上に美しい愛情の世界——たぶん退職する教師と、お別れに來た教へ子との交歡であらうか。僕はさう想像して、莖中氏の人柄にあらためて感心するとともに、羨しくさへ思つた。

敗戦後の教育界——今もその余波を濃厚に保つてゐることは、このごろ教師生活に歸つた僕自身の痛感するところである。そのなかで、莖中氏は本當の教育者としてあり得、あり得なくなると子らを泣かしめて去つた。僕は忘れてゐた美しい寶石を見る氣持で、これらの歌をくりかへし讀んだ。

今度はこちらが訪問する番である。前日買つた「古泉千樞歌集」をふところに入



石見

入れて、午後家を出た。鳥見山の北麓に沿つた街道にある外山部落を出て、街道は忍坂へ行く道と分れる。忍坂は古事記や萬葉集に出てくる地名である。そこからしばらくゆくと追分部落。こゝで三輪、金屋（むかしの海市稲市）から來る街道と道があふ。僕は懐古的になつたり、追分といふ地名から、信州の同じ名前前の部落で病を養つてをられる、彌辰雄さんのことを思ひ出したりしながら、三輪山の南のふもとに慈恩寺、鵬本、黒崎と並んでゐる白壁の多い、柿の實つた、稻田の熱れた村落を順々に見てゆく、最後の部落が、莖中氏の先祖代々の村なのだらう。大体この街道は伊勢街道で、芭蕉も通り、大阪からのお伊勢参りの往來した道なので、道ばたの草木にも、何か思はせるものがあるのだが、僕は、いまは近鉄と呼ばれてゐる参宮急行電鉄が敷設工事をしてゐる頃、高等学校の生徒で、桜井の保田與重郎に室生寺へ案内してもらつて、歩いて行つたことがある。二十年近い昔のことと思ひ出さないではない。

おかげで二十町以上の道にも退屈しないで、黒崎の村の外れに來て、それから街道をそれて、部落に入り、尋ねると、黒崎でも一番東の端の家が、莖中氏の家であつた。新築のはなれの二階に通されて、莖中氏と話したことは、何だつたか。書棚には、前川佐美雄氏の本はもとより全部、茂吉の本もそろへてお持ちなのが羨しかつた。このときお茶とお菓子ですすめて下さつたのはいふまでもなく「天雲」の中に

○春おそく妻をむかふる日となりてけしきばみたる山を愛せり。

○君が肌青く透きゆく夜半なれば枕べに來てにほふ螢ぞと歌はれた、迎へられて間もない夫人だつたのである。

いま僕は、莖中氏と同じく大阪で教師をしてゐる。大和の生活は辛かつたと妻がいふ。いまの生活も樂でないのに、それより辛かつたと云へば、よほどひどかつたのだらう。それでも忘れつづい僕は時々なつかしく大和の方を眺めやる。なつかしく思はず理由の一つには「天雲」の作者との往來もたしかにある。作者よ、どうぞ時々歌の話をしに僕の家にも來て下さい。

「天雲」出版記念會

一月五日、新年歌會をかねて「くれなゐ」同人たちで、内輪の「天雲」出版記念會を莖中清市宅で開いた。信貴山の怪童の名のある池田道夫、兵庫の貴公子難波禮二、著者、小生等ではじめた。

御出席下さるはずの、今中颯溪、田中克己両先生は残念ながら御都合悪くお見えにならなかつた。五日は、ごうも多くの會することを望むのは無理らしく同人諸君も少かつたのは存外である。

先づ、別掲の批評書狀を拜見した。やがてスキ焼をはじめ。スキ焼のヒケツを僕が教へる。二升の酒が忽ちなくなり、みんな思ひ思ひのことを、しゃべつて笑つてゐる。恐しいかぎりである。

話が「くれなゐ」創刊の昭和二十年頃の思ひ出や舊友のことに及び懐舊の情ふかく、しみじみと語り合ふのであつた。時を見計らつて僕は記念寫眞をとる。天然色寫眞をとる豫定であつたが、天候の具合で、白黒シャシンに切かへる。莖中夫人や令嬢を交へて、雑然たる宴會現場の片隅に集つた。

續いて飲みなほし、唄をうたふ。「富士の白雪」でうたふのをやめて「くれなる」の將來を大いに語る。池田道夫君は「くれなる叢書」の一篇として歌集「苦行林」を、同友、

# 『天雲』の横顔 山口 實

歌集『天雲』には序もなく、後記もなかつた。それで、あらし彼を紹介しておかう。ふるさとの大和の国の山なみの青かりければ足はづむなり

この大和が彼の故郷である。もう少し細かく説明すれば、長谷寺の附近の黒崎といふ村だ。

彼は其処で成人し、そして結婚して、後に上阪した。一女の父であり、教師である。彼については「くれなる」の六一号で述べたので、ここでは「天雲」の横顔といつた感

句で、素直に想ひをのべてある点である。風つよく海あるる夜ぞさらさらにかはける白き砂は深し。

僕は、暗黒の中の白い砂を愛する。彼の詩人としての感覚は、こんなところに、時々ひよつと首を出すのである。

山の子は山にだかれてれむるなり風さやかなる秋のゆふべぞ  
彼は時折こんな構へかたをす。歌ごころがおのづから、ゆらゆらとゆらめいて、自然の人間の氣持を表現したと言つたような、快よいリズムの歌を作るのである。

右のような歌の感じが「天雲」を縦に貫いてある。  
水すまし一つ舞びある朝あけの小さき溜りは雲うつしたり  
こんなものを見方を前から、彼はしてあるが、この歌はそれらの歌の代表的なものである。それ故にこの歌を抜いた。  
ごつごつとする感じの歌を探したが、無かつた。彼はそんな歌は作らない。彼の感情は歌の言葉の上に必要以上にのさばらないで、言葉の裏がはに、染ものをしたように、しつとりとしつんでゐるのである。

安田武夫氏も題未定ながら同じく上梓する由前途を祝福しつつ乾杯。著者以外皆、豪華なる処女歌集を夢みつつ、散會。(山口記)

父になるまでの、色々の出来事心の記録といつた具合のものである。「天雲」を讀んで一番先に感じることは、父性愛のあふれた歌の多いことである。

この子供に對する愛と、妻への愛は、人によつて、多少の色彩を異にするのである。この邊りの微妙な心理は、僕は未だ結婚してゐないし、勿論子供もないからはずきり解らないが、莖中君の場合を考へると、両者に對する愛情はバランスがとれてゐると、おもふのである。

何故こんなことを書かなければならないかと言ふと、詩人たちの子供に對する愛情はある場合、妙に深刻なからである。「とうとう生れて来たな」と言つた具合に、苦しい人生に生れて来た、小さい命に對して、おこる

まなぶたにたつた一つの螢のみうつして暗き道を急げり  
カメラでうつしとつたような、しぐさの中に哀感がある。よくこの歌に似たような歌を見かけることもあるが、この歌は彼のはひが表面にはつきり出でゐる。たつた一つこんな言ひ方が、案外彼の独自のものの、つかみ方かも知れない。

花曇り雲雀を追ひてあそびつつ遠ざかりたる山かへり見る  
少年のころを失はず、彼はいまでも持つてゐる。そして少年の瞳にうつる色彩は、水彩的な淡い色の感じである。  
うつすらと霧のながれる朝の風景の幾何学

「天雲」の作品のすべては、いづれも何らかの角度において莖中さんの人柄を反映して、私はこの歌集を拜見しながら、莖中さんに對する尊敬の念をいや更に深くしました。  
温い愛と美しさは、なんといつても、莖中さんの歌を支へる中心の力でせう。しかもそれらのものは、微塵、のしかつて来る主義的な燥念と壓迫とで、私を苦しめるやうなこと

自分の沈痛な感情の告白。こんなものがあるからなのである。その点、彼はそれが無い。実にらんまんである。これはは、まましいことである。ものごとを必要以上に深刻に感じない。このことは彼の同胞に對してでなく、自然に對しても、さうである。ものごとを明るく見ようとしてゐるのである。これは「天雲」の歌の特色なのである。

「天雲」の歌を悪く言ふ人があるとしたら、その人は、僕の言つてゐるような見方をしない人と言つて差支えないであらう。但しこのことは一首一首の歌の優劣の問題ではないのである。彼の歌柄のことを言つてゐるのである。彼の希求してゐる方向。また彼の歌の底に流れる、感情を、僕は僕なりの見方で以上のごとくながめてゐるのである。

彼の歌を少し論じて見よう。  
白きバラこよひ咲けるを見たりしが、ひしと抱けば君はかなしき  
この戀歌は、やはらかい感じがする。火のような激情ではなく、めんめんとしてゐる。この歌の好きな点は、バラを見ながら、バラに集点を合はさず、軽くながめながら、結

以上紙幅の制限もあるので、この邊で歌の感想は打切るが、彼はやはり「たまたなづく青垣山こもれる大和しうるはし」の自然現である。僕は彼に期待したい。  
それは自然な明るい歌を作つてもらひたいことだ。野つばらで天を見てゐる。馬の瞳のような、愛情のこもつた歌である。  
僕は「天雲」の出版を心から祝ふと共に、以上のことを彼に期待したい。

## ●●● 天雲を支へる力難波礼二 ●●●

はなく、却つて、その謙仰さと、おちつきあがる静かさとは、私を安んぜしめ、寛がしめてくれました。細かに行きとどいてゐながら、純直と素朴とをうしなはぬ莖中さんの把握の技法とは、その実生活を適度に作品の旋律に移し得て、そこに佳き調べを奏であけてい

# 天雲の作者に寄す

(いろは順)

取敢筆御礼旁々心からの祝意を表し申候

敬具

○ 今中 楓 溪  
謹呈 歳末と相成申候いよいよ御多祥の御事と存じ候

○ 池田 克 己  
舊臘は御高著「天雲」頂き有難うございました。圓熟、俊敏を併せた御歌風にいたく感銘を受けております。取敢す御禮まで

○ 石川 信 雄  
御高著「天雲」ありがとう、小生もことは少しやります

○ 長谷川 銀 作

御高著「天雲」ありがたうございましたあつく御禮申しあげます。序文が後記がないのは少しあつけない気がします。いつころの歌なのか、誰について学んだのか、やはりさういふ事がわかつた方が便利のやうな気がします。ゆつくり拜見して勉強の足しにいたしたく存じてをります。とりあへず御禮まで、ハガキで失礼おゆるし下さい。

○ 西村 陽 吉

拜○ 貴著歌集「天雲」御惠贈に預り正に落掌ありがたく御禮申上候 敬具

○ 堀内 民 一

師走愈々御清榮の御事と存じます。さて本日御歌集天雲一巻御惠興に預り忝く存じますまことに美しい短歌の、天の産聲をさく思ひに巻初拜見仕りその高韻に心ひかれました。春のはじめの心ほぎに加へて、貴詠をゆつくり拜誦できますことなよろこび居ります。いつも「くれなゐ」ありがたく存じます。ますます御健勝の程祈り上げます。御禮まで

○ 土岐 善 曆

御歌集「天雲」をありがたく頂きます。新春を迎え、いよいよ御清榮を祈ります。

○ 尾上 八 郎

新年のおよろこび申し上げます  
舊臘は御歌集天雲をわざわざ御おくり下さりましてまことにありがたく拜讀いたし蘇がへつた氣になりました  
あつく御礼申しあげます

○ 川田 順

○ 天雲  
一巻正に拜受、厚く御禮申上候

○ 吉野 秀 雄

拜啓 御高著「天雲」御惠寄にあづかりまことにありがたうございました。いつも「くれなゐ」でお作みてまゐりましたが、かうして一冊の歌集にまとめた御苦心察せられます。私は歌風を異にするものですが、しかし例へば

○ 春草の青き芽をふく川岸に來てなづなの一葉子に握らしむ

○ 蛙なく夕べとなればゆきてみむ月見草白き橋のたもとに

○ 笹の葉のさやける山に妻子つれ登ればとほくゆく秋の雲

などはよくわかりますし好きでもあります。先は一筆御禮まで 勿々

○ 谷川 徹 三

御高著御惠送にあづかり有難く御礼申上げます。

○ 高濱 虚 子

天雲御惠送下さいまして万謝仕ります。

○ 高橋 新 吉

拜啓 このたびは歌集「天雲」をお送り下さいまして、御芳情あつく御礼申上げます。

父親になられたよろこびの歌など面白く拜見しました。御礼まで 草々

○ 中 勘 助

御高著天雲を御惠送下さいまして有り難う存じます。厚く御禮申しあげます。

○ 中村純一(創元社編輯部)

寒氣いよいよ厳しき秋、益々御清榮の御事と拜察申し上げます。本日「天雲」一部たしかにいただきました。有難うございました。丁裁、内容とも清新の氣に満ち甚だ爽快な歌集と思えました。ゆつくり讀ましていただきたいと思えます。御健筆お祈り致します。先づはお礼まで。

○ 中野 菊 夫

御著 天雲 出版をお祝ひ申し上げます。御惠送にあづかりありがたう存じます。仲々出版のむづかしいときに相ついで叢書が出版される御様子、慶賀のかぎりです。先づはとり急ぎ落手御禮のみ。

○ 宇井 英俊(NHK)

今年もおしせまりました。お忙しいこと、存じます。歌集「天雲」御惠送下さいましてありがたう存じました。なかなか御立派な御

本早速拜讀させて頂きます。

取あへず御礼まで 勿々

○ 植松 壽 樹

御高著「天雲」ありがたく拜受いたしました。厚く御禮申し上げます

○ 野長瀬 正 夫

啓 クリスマス前夜に、御著歌集「天雲」を御惠送にあずかつたのはまことに嬉しいことでした。二首三首とよむうちに、私は戦争中に生れた子供を苦勞しながら、育てたことなど思い出し、ひとしほ感にたえぬものがありました。

今月私たちの會社は不況のため解散、浪人になつた私は今宵ささやかな、クリスマスツリーをかざつて、その子供たちと夜のひとときを過したところです。あなたの御作品を拜見して何やら、心のあたたまるのを覺えまして。厚く御礼を申し上げます。何卒よき年をお迎え下さい。あなたも大和の生れなんですね。なつかしいです。

○ 岡野直七郎

謹んで新年のお祝詞を申し上げます。歌集「天雲」御惠送下さいましてありがたく拜受いたしました。

○ 小田切秀雄

「天雲」落手しました。さつそく拜見しました。全体として技術的に危うげのない安定感があり、それは歌壇の安定した日常性と調和していると思えました。歌としての特色も不満もそこにあると思えます——やはり最後の「天雲」一連と、出産の歌などを特に出色と思えました。御勉強を祈ります。

○ 太田水穂

御歌集天雲ありがたく頂きました、清新の抒情、御発展を祈ります。

○ 山内義雄

御高著「天雲」ありがたく御禮申上げます。小生只今神経痛にて病臥、疼痛になやまされ落ちついて拜見の折を得ませんが、ふと目にふれた「しほれたる董の花を子の手よりとりて浸せり浅き流れに」……「何事も眼にいたましくうつるなれば春まだき野に花を廻りとる」

にうかがはれる愛情にふかく心を打たれました。不取敢御礼のみ

○ 山岸外史

「天雲」拜受致しました。なかなか、音吐朗早速、拜讀致しましたが、なかなか、音吐朗

々、うたうに堪えるものがあつて感動いたしました。

夏雲の高くのばれば高きほど汝が産聲のたかひびきて

など「ひまはり」の章の歌、みな、よろしいように讀みました。新鮮で清潔なことを、たいへん嬉しく思ひました。

祖父をばふりてはやも幾月ぞ落葉をふぬば音立ちにける

妻と来て落葉の山に佇めば谿に聲する山人らしき

ことさらに人をほめたり水仙の花はしづかにゆれてをりしが

赤不動のひとみに挑め寒の夜のしじまに消えゆく火をかきたてて

山は枯れ野は枯れ空はうつつなり春まだき里のあげひびりかな

まだ全部、讀みおえたわけではなく、ほぼ五分の三ほどのところでありますが、いろいろ楽しみながら頁をくつてゆきました。

自分がいま、左翼に屈しているの、あながたが、そんな方向についてどんな意見をおもちかと、人知れず、そんな角度から、判讀した歌も三つ四つありましたが、すべて暗い影

がなく、あたたかな人肌を感じ、純潔な人柄を好ましく、また嬉しくよみました。ピカソの希臘期のあの人物たちを思ひ出したりしました。孤獨にあたたかく住む人の、さりとして

見いだく腕にも力があり、ふと、立ちあがれば、地平のかなたを屹つとみそらかな勢ひもあり、なにかと、頼母しくみたのであります。

ふとこの歌集の末尾のところを心配して「天雲」の章をのぞいてみましたが、

天海のむかふの山に悠揚とさしのぼる目ぞかがやきわたる

雲の峯くづれ押しくる深溪のま上に立ちて叫びをそあぐ

やはり、わりきれている姿勢を感じて、なにか、安心したと書きたいようなところもありました。新風がたてられるのではなからうか。そんな眩きをもつたのは、小生の感動癖

のいたすところか、それとも、なにかとうち凋れて暗い歌のおほい今日、あなたの歌の明るさが、こんな搖影を、私の心の山に投影したのでありましようか。

歌によると、觀念の殘像が多少のこつてい

るようみられるものもあるかと感じましたが、未來を空想させるところ、小生には、よ

ろこびのある歌集でした。

ひとつひとつ、批評すれば、かぎりのないこととあります。まだなにかと話しかけたい氣持ものこつておりますが、早速、お礼申しあげたい氣持で、ペンをとつた次第であります。

なほ、小生、昨年、七ヶ年ぶり、ようやく上京、表記のところに住んでおり、廻送のため、すこしほど、落葉の御返事もおくれた次第であります。

同封されてあつた「くれなる」誌をよむと田中克己氏の歌もありましたが、もし、彼にお會ひの節は、よろしく、御鳳聲あるようお願いいたします。

この父のしづかに立ちて子を抱くその歌聲に力もこもる

○ 矢代東村

拜啓、天雲と、くれなる60号有難う、御歌集の作品、あかるい温いものにつつまれたような楽しい氣持で讀みました。お入柄の然らしめるところと敬服、しかしこういう態度と作品が荒々しい現実に向い取組んだ時どうなるのでしょうか。これは興味ある問題です。右とりあへず御禮まで

○ 矢嶋観一

あたらしい年のはじめに

貴兄の御健勝と御清福をいのります。御上梓の歌集「天雲」御惠送にあづかり御禮申します。啓發させていただくのをたのしみに新年にゆつくり拜見します。

○ 保田與重郎

「天雲」おおくり下さつてありがたう存じます。美事な本になつて大へんお心づかひだつただらうと察せられます。御歌はそのうちゆつくり拜見しますが、小生なほ半分の病床生活、御歸郷の折でもお立寄り下さい。草々

○ 前川佐美雄

拜啓、御手紙と御歌集とを頂きました。歌集は大変よく出来てなりました。歌集は出して悪いわけは勿論なく、その時を考へた方がよいので、いつかそんなことを申し上げた筈ですが、これを段階として勉強なさるやう祈ります。

○ 赤木健介

被占領地の後方ふかく  
パルチザンたち  
飢えて襤褸着て  
なおもたたかう

一九五二年元旦

美しい御歌集「天雲」お送り下されありがとう存じました。古典的な形態の中に清新な自然感覺が流れているのに心ひかれました。

○ アララギ発行所

御新著「天雲」御惠贈に預り有難く厚く御礼申上げます。いづれ熟讀の機を得たく取敢えずお礼申上げます。

○ 荒正人

歌集「天雲」お送りいただきあつくお禮を申しあげます。まづはごりいそぎ

○ 浅野梨郷

拜啓、御歌集「天雲」の御惠與を忝なくお禮申上げます。型の変つたもので見る目も珍しく珍重に存じます。年末年始の好伴侶として拜讀させて頂きたくのをたのしみにいたしております。

詩情ゆたかに流れたものとして、あたたかさを感じます。御礼申し上げます。匆々

○ 齊藤茂吉

前略、御歌集御惠送忝くお礼申上げます。嚴寒の朝一入御自愛御健勝のほご祈上げます

頓首

天雲の佳作 保田與重郎選

一ときを時雨の過ぎて明るめば墓碑ぬれて吾がまはりに高し  
梢にはすでにかぞふるばかりなる雑木もみぢの黒き色かも  
山は野は枯れ空はうつつなり春まだき里のあげひばりかな

○斜なる道五首

行く道のひとすじなればあら草の穂芒なびけ吹く秋の風  
斜なる道とほりたりつむじ吹く荒野に立ちて見つる夕映え  
潮風が蕎麥の花畑こゆるなり夕陽はあかくもえにけるかも  
帰り舟待ちつつ吾は蕎麥の花咲く砂濱に直ぐ立ちたり  
上り魚の息づかひわづか残りたれかなしきばかり秋陽すめるを  
二見ヶ浦いさごの松葉ふみもゆけ知多は暮れゆく雲垂りにつつ  
山の子は山にだかれてねむるなり風さやかなる秋の夕べぞ

機関車 六首

はつ夏の夜雨の冷えをおぼへつつ汽車にい寝たり山陰のみち  
きこゆるはただ機関車の山のぼる重き音のみともは語らず  
湯の町の備後の國の山ふかく今宵はじめてかじかききたり  
赤山や牛が田を鋤くはつ夏のあしたさやかに驚のなく  
はるばるに馬ひきて來し國境こころ高山の春はおそしも  
やけあとにもゆるわらびをふみしめてゆく高山の野は廣らなり

いつの日の夕べの雲をるがきけむ水繪にのこる紅の色  
夜の海の寒きに立てば海と空つらなるほどはかなしかりけり  
水すまし一つ舞ひゆる朝あけの小さき溜りは雲うつしたり  
べうべうと吹き荒ぶときに舞ひ上る屋根瓦みつつうなづきてぬぬ  
雞頭の破れし葉こえて吹く風のいつち消ゆらむまの夕べに  
何事を吾は念すべき手を合せ父のしぐさに倣ふ子のため  
音もなく山瀬の村の細き道に沿ひ下る水の春の小流れ  
乳牛のはだら牛あそぶ春山を仰ぎてをりぬ心たのしく  
きんぼうげ咲けるをふみてくだりゆく夕山かげに落つる日のいろ  
菜の花のはや過ぎなんとする野べの雨となりつつ暮れゆかむとす  
春おそく妻をむかふる日となりてけしきばみたる山を愛せり  
妻と來て眼は嵐山の上にある夏雲戀へりやや疲れつつ  
先がけて咲く紅梅にまみ寄せて別るるきはに何思ひけむ  
去る子らに春は花咲く田圃みち冷めたからざる露のかかりて  
はしやぎて車窓にあそぶ童女の眼はかがやきつ春なればこそ  
石山寺の石ふみのぼれ木もれ月に白く輝やくをふみのぼれ子よ  
泥船の泥かき上ぐるひびきさへ春はのどけきしがの唐崎  
ほのかなる比良の夕ばえ仰ぎつつ子ろの手をひき急ぎたりけり  
朝あけのしばらく前をちよるすの鳥なき交すこころ高山  
行者らが白き衣をぬらしつつ悠々と岩をふみてゆくなり  
耳も裂け身もくだけよといかづちの狂はふ山は猛き雄の山

○齊藤 史

御立派な御歌集ができましたねおめでたう  
ござります。わたくしにまで御送り下さいま  
してありがたく存じます。はい見なしたのしみ  
にいたして居ります。年もつまり仕事に追は  
れつづけ閉口です。  
とり急ぎお禮まで。

○佐藤 佐太郎

歌集「天雲」御上梓お喜び申し上げます。御  
惠送たまはり忝く拜受致しました。早速とこ  
ろごころ拾讀み致しましたが、只今は時間に  
追はれて爲事してゐますので、いづれ年末押  
つまり余暇が出来ましたらゆつくり拜見する  
つもりでゐます。小誌「歩道」にでも紹介さ  
して貰ふつもりでゐます。とりあへずお礼ま  
で申し上げます。

○木村 捨録

本日は御高著天雲を御惠送被下御礼申上候  
ゆつくり拜讀の上にて、小感なものをする機を  
えたく存候へども、そのユニークある作品群  
への御特進さこそと祝福申上候不取敢御禮申  
述候

○木水彌三郎

賀春、先日は立派な御作集有難く拜受いたし  
ました。この休みにゆつくり拜見したく樂し  
んでおります。いづれゆつくり御礼申上げる

つもりで居ります。いよいよ御筆硯の清から  
むことを祈りつつ

○見原文 月

天雲、おめでたう存じます。なかなか立派  
です。いま懸命によんでゐます。ある時期以  
后(リアリズム)に對する反省がなされてより)  
のお作品のやうに見受けられます。お礼まで

○新 村 出

昨日は貴歌集「天雲」を頂戴いたし直に拜  
讀いたし候、印刷もひろびると大らかに老  
眼にも讀みやすう、早速一とほり拜誦受吟仕  
候高雅、明朗、潤達、老情を喜ばしむる所多  
く御厚情感謝の至に存候行雲、蒼空、黒潮、  
鳥虫耳目をたのしましめていただきたること  
うれしき限と存候、御礼まで かしこ、

○平野 威馬雄

まづたく押しつまりまして、霜柱が胡粉の  
様に朝の食卓に匂つてまいります。  
この霜の光る朝「天雲」を御惠贈いただ  
いたわけ。美しい歌の粒々清楚な装でい。師走  
の忙しさの中で小閑を愉しむことを許された  
形。厚く御礼を申し上げます。  
詩より親しみ易く清烈で。  
よき年をお迎え下さいませ

★紙巾の都合上掲載をひかえました多数の書  
牌は次の機会に掲げさせていただきます。

歌 四首

田 中 克 巳

何ゆゑの泪と知らず泣きすぎて頭いためしなれとわかれぬ  
わかれぎは怒りがほせしわがかたを見ぬさまつくり送りし子あよ  
きぞのみしかフェーのあまさ目ざめたる心にかなしわがこひのごと  
にがよもぎ苦くしなりぬ國亡びこひにやぶれて市に飲むとき

白・青・赤

山 口 實

心こめてわれの磨きし寶石につぎつぎに白き女体がうつる  
をとこ女をとこ女が輪になりて競ふ花札に夜は更けわたる

バラに刺された指先の痛む気持を詩にかいた女流詩人は忘れぬ

肌白く髪青々とかがやけば情火は赤く身をかけめぐる

戀の矢をつがへてぐつと引きしぼる力まかせのそのせつなさよ

散る紅葉

難 波 禮 二

絶え間なく紅葉ちりかふ溪にそひ溶れたる岩を踏みてわが行く

落ちたぎち渦巻く水に散りてゆく紅きもみぢの限りなきかも

くれなるのみぢ散りかふ峽壁の下は静かに舟を流しつ

もみぢ散る狭間をおほふ空にして雲うちひかり峰を越えゆく

うつそみの物とも知らにあやしくもま空の響われをつつめり

身 邊

われ病みて思ひにすぐること多したじろぐことのあらぬ君をも  
目をあけて見るや遠べに立つ山にあゆみ近づく事をしぞ思ふ

短 日 抄

安 田 武 夫

入陽ま赫く大根干せば柿の枝のきしむ音してうら寂しかも

人戀ふる思ひ秘めて仰々視野に散りくる枯葉美しく見ゆ

生きの目を憂はしみつゝ亡き母の命日を子らと墓に詣でぬ

冬枯れの野邊歩みつゝ簾蔭の小道に赤き南天を見ぬ

南天のま赤き小粒目にしみて入陽に立てる母の碑の見ゆ

打ち果てし野川の橋のわれ目より芹むらがりて和らかに伸ぶ

育ちゆく吾子の欲望つぎ／＼に聞き流しつゝひとり臥し居り

臥し居れば冬陽溜りてほの温しわだかまりたる憂消えゆく

縁下に数多卵を見つげりと子らはしやげり冬の朝を

終列車警笛ながく過ぎ去りし寒夜をひとり飯はみてあり

六 根 清 淨

埜 中 清 市

室いでて星のあかりに先づ見しは遠長く白き雲溪にして

星のふる富士の夜明けを声たかくとなへて登る六根清淨

朝目にも白くうつれる雲海の動きは見ゆれとほくほのかに

ただ雲の上をゆきゆく思ひして富士山頂をさして急げり

頂の一丁道をせきゆけば日の出太鼓の音ぞきこゆる

天雲の放談

池田道夫

去年の八月のひとしほ暑い日の午后だった。大阪アペノの近鉄のホールでいよいよ埜中君の歌集が出るといふことを御本人の口から聞いた。「天雲? フォーム、いい名前つけたなあ」と、正直なところ僕はだいに羨しかった。そして今寄贈をうけたクリーム色の表紙をなぜながらいろいろな回想に耽る――

山の子は山に抱かれてねむるなり

風さやかなる秋の夕べぞ

埜中君の生家は「朝倉や木の丸殿」で有名な朝倉村の東端の丘の上にある豪農で、前に流れる初瀬川をはさんで向ふの丘陵を近鉄の急行電車がごうごうと音たててトンネルに入るの見える。母家の東隣に物置があり、その二階が埜中君の書齋だった。物置と云つても仲々大したもの、二階にも立派な部屋が三つもある。もう六、七年も昔にならうか、そこで僕らはかきもちをかぢりながら歌の話をした。北側の壁にははうづ高く書物をつみあげ、又、やたらに油繪や水彩の額がぶらさげである。ついでに云つておくが埜中君は画才に於てもなか／＼歌におとらぬ名手である。そこで彼がこの十代に作つた歌を朗詠した。その頃僕は

また二十才をわづかに超したばかりだったが、この十代に作つたといふ舊作を見て大いに驚いたものだ。そしてこの詩人をはぐくんだ初瀬の丘陵を窓からながめて感慨にふけた。

あかく燃え沈む夕日に面伏せて

佇むあたり夏草のいろ

埜中君が奥さんをもつた。お祝ひに贈つた時計はたしかに山口君と僕が心齋橋で買ったものだ。お祝ひの宴は埜中君の新築の母屋で開かれた。参會する者。前川佐美雄先生。山口実。生島資子。塚本邦雄。死んだ杉原一司。加藤英之助。僕などだった。僕らは若い奥さんの響應を受けて大いにウラバミの本領を發揮した。

海のむかふのいくさのさまは言に聞けど秋はさながら  
美しきかも

埜中君と山口君と僕とは歌會のあとなどよく奈良の公園をうろつき、歸りには大阪の場末の立飲屋でタべつた。一番よくしゃべるのは山口君で、彼がしゃべりまくるかたははらで、僕は空を見、土を見、過去を想ひ未來を感じて切なく悲しく、ヤケクソの如く、のら猫の如くふらふらとゆくしかし埜中君はうがつてゐた。常に口元に微笑をうかべて山口君の話に合體を打つのである。埜中君は陶淵明式詩人である。彼の境地は純粹に東洋の詩境であり、悠然として南山を見、肚の詩人である。

朝のけのしばらく前をちよろづの  
鳥なき交すこは高山

の高風はさながら彼の人格である。僕は頭が下つた。